

『白鯨』のかくれた意味について

— Hidden Meanings of *Moby-Dick* —

前 田 禮 子

『白鯨』の文体の難解さは、作品の構成や語句の中に、作者によって意図的に伏せられた意味がかくされているからである。

例えば冒頭にある ETYMOLOGY について考えてみる。

ETYMOLOGY

(SUPPLIED BY A LATE CONSUMPTIVE USHER TO A
GRAMMAR SCHOOL.)

THE pale Usherthreadbare in coat, heart, body, and brain: I see him now. He was ever dusting his old lexicons and grammars, with a queer handkerchief, mockingly embellished with all the gay flags of all the known nations of the world. He loved to dust his old grammars; it somehow mildly reminded of his mortality. (p.3)⁽¹⁾

青白い顔色をした結核やみの文法学校助教が、全体と部分との関連を全く理解せず、末端の調べものに精を出すうらぶれた姿がある。ところが、道化をおもわせる派手なハンカチなどを持った、いささかこっけいな悲哀にみちた姿の背後に、別な異質の人物の姿がちらつくのである。一人の普遍的な偉大な人生の導師ともいうべき人の姿が、つぎに続く文章の中から影のようにぼんやりと浮かび出ているのである。

GRAMMAR という単語は、語法、文法などという表面的な意味から拡大していくと、入門書、手引、原理などとおしすすめられる。⁽²⁾ さらに、奥義としての形而上的な言葉の原理という 意味にもあてはめてみることができる。SCHOOLも群れ、学派、修練道場の語義があるから、GRAMMAR SCHOOL は、なにかある結社の入信者のための手引書といった秘密の意味を持っていると解釈することができなくもない。

そうすると、つぎの

The pale Usherthreadbare in coat, heart, body, and brain; I see him now.

(1) MOBY-DICK or THE WHALE BY HERMAN MELVILLE: Ed by CHARLES FEIDELSON, JR. (Bobbs-Merrill Educational Publishing, Indianapolis, 1978) 以下のページ数はこの版からとった。

(2) 「英和大辞典」(研究社)

『白鯨』のかくれた意味について

は、色青ざめた導師が、ぼろを身にまとい、心身ともに燃焼しつくし、放浪の苦行僧の姿をして、幻のごとく姿を現わしている。 *consumptive* は、身心の燃焼といった精神的な意であって、病名ではないだろう。 *Usher* は大文字で書かれているから、徒弟を導き見守る導師の意であろう。 *pale* は黙示録（8：6）にあるこの世のものではない蒼白い騎手を連想させる。だから、浮び上ってくるその姿を「今まのあたりに見る」（ *I see him now.*）は、簡潔にして黙示の面目を内に秘めているのである。

old lexicon のほこりを払うとは、古くから伝承されてきた秘密の知識の奥義を古文書の中から掘りおこしているラビの姿といった拡大された意味を持つだろう。

with a queer handkerchief, mockingly embellished with all the gay flags of all the known nations of the world.

この文章から、派手なハンカチーフで古本のほこりを払っているなどというような戯画ではなく、さまざまな民族の旗をかたどった布切れは、 *Usher* が結社の導師であることが結社のメンバーにしかわからぬ秘密のしるしとなる。世界各地の結社の紋章の標旗といったものであろうか。結社の仲間たちが、おたがいに相手が盟友であることを暗黙のうちに認め合うことができる、いうなれば、暗号、識章、符牒のようなものであろうか。

…… *it somehow mildly reminded him of his mortality.*

は、 *pale Usher* の青ざめた色とつながって、結社の motto が *Memento mori*（死を忘れるな）などのような生死観ではないかと連想されるのである。一人の現代の学校助教という具象の相の背後に、永遠の相のもとに存在する導師という大きな人生の教師の幻の姿が浮び上っているのである。この幻のことを *Melville* は *phantom of life*（p.26）と呼ぶのである。この幻の姿は神なるものの姿とも、また *Ishmael* の姿とも重ね合せられているのである。 *phantom of life* と呼ばれる大いなるものの姿と白鯨の姿も重ね合せられていて同心円上に動いているのである。普遍の幻の姿と仮象なる具象の姿とを重ね合せて観想する作業が、この作品の読み方の大きな主眼となっている。

さまざまな民族の旗のしるしからは、結社の大義が自由や平等などといった新しいヒューマニズムの一形態であろうことが推測される。 *Malville* がフランス革命や独立戦争の背景となった新しい思想に関心を寄せなかったとは考えられない。 *Whitman* のようにあからさまに表現せず、 *Melville* が神秘主義の形態をとって表現したなどとは、 *Melville* の多言ぶりからは想像しがたいことである。 *Melville* の表現は表面上は粗野で unnecessary 部分が多いように見えるが、そのじつ偽装であるばあいが多し。

もう一つの ETYMOLOGY について、

ETYMOLOGY

“While you take in hand to school others, oand to teach them by what name a whale-fish is to be called in our tongue, leaving out, through

『白鯨』のかくれた意味について

ignorance, letter H, which almost alone maketh up the signification of the word, you deliver that which is not true.” Hackluyt (p.5)

「他者を教え導く仕事を手がけるとき……」とあるから、これは新しい入信者を受け入れて導くときの導師のための手引きの銘句であろう。Hという文字は、象形的な表象として眺めてみるとどうであろう。二本の円柱が直立していて、それが一条の線によって連結されている、と見ることはできないだろうか。whale の発音は h を発音しなくてもよいかから、h が綴りから省かれがちだというごくありふれた事柄の奥に秘義がかけている、と解釈したらどうだろう。H の字義が解けなかったら、鯨の意味の何たるかを見誤るであろうと、少くとも Melville は警告している。

H の字に二本の円柱のイメージがあるとすると H には別の世界に入るための入口の門のイメージが出てくる。この門はおそらく「不思議な世界の大きな水門」(the great flood-gates of the wonder world) (p.30) を指していると思われる。水門は『白鯨』の大きな主題であるから、たびたびこれについて述べることになるが、この水門に到達できるのは鯨の道に従って行った果てにであろう。このことを EXTRACTS の中で聖書からの引用句を『白鯨』の motto として Melville はあげている。

“And God created great whales.” *Genesis*.

“Leviathan maketh a path to shine offer him; One would think the deep to be hoary.” *Job*. (p.9)

「神、大いなる鯨を創り給えり」(「創世記」)

「大いなる鯨、おのれのあとに光る道を残したれば深淵は白頭をいただけるかと人をして疑わしむ」(「ヨブ記」)

鯨の航跡である「光る道」を追っていくと驚異の世界の水門に到達できることを Ahab は知っていたので、彼は羅針盤もなにも捨ててしまって Moby-Dick を追ったのかもしれないのである。「ヨブ記」の「深淵は白頭をいただけるかと……」は Moby-Dick の白さとして Melville が答えたものであろうが、Ishmael が捕鯨航海にさきだって見るつぎのような幻想も、これに呼応しているのである。

……one grand hooded phantom, like a snow hill in the air. (Chap. I, p.30)

(頭布をかぶった大いなるものの幻、雪をいただいた山が空にそびえるようであった。)

Melville が『白鯨』の motto としてあげている『ヨブ記』の引用句の中で問題になるのは、Leviathan はさておき、「白い、白髪の」(hoary) と「輝く」(shine) と「道」(a path) である。「白く輝く」には太陽のイメージがある。「道が白く輝く」からは、太陽の軌跡つまり黄道のイメージがある。「白髪の」からは老人の姿をした神のイメージがある。Leviathan makes a path と文章を故意に切ってみると、「鯨が道案内をする」というニュアンスが感じられる。『白鯨』の中には、白と黒の対比ばかりでなく、光り輝

『白鯨』のかくれた意味について

く太陽のイメージが強烈的なものである。太陽が Ahab を Moby-Dick のもとへ道案内しているのである。Doubloon に太陽の刻印が打たれてあって、一年のいつごろ Moby-Dick に会うことができるか示されている。Ahab はそういう秘密の知識を解読することができるのである。「道」にはほかにも意味があるのでそれについてはのちに述べる。太陽のイメージは作品中くりかえしくりかえし現われるが、なんのために太陽が Moby-Dick のもとへ道案内するのかは、おそらくなにかある儀式の執行のためと思われる。Melville の観念の中では大部分を占めていたのかそれとも一部分であったのかはかばかりかねるが、『白鯨』の中では「道」は不思議な首尾一貫を示している。

ETYMOLOGY にあげられている外国語起源の単語のいくつかは、Feidelson の指摘 (p.5) によると綴りに誤りがある。Hebrew の *ip* と Greek の *Xηros* と Danish の HVALT である。不正確なのはおそらく、不注意からではなく、なにか視覚的な意図があつてのことではないかとおもわれる。たとえば *κηros* を *Xηros* としたのは *X* が「鉗十字」(The Crossed Harpoons) (p.32) の形に似ているためなどではなからうか。HVAL を HVALT としたのは、VALT を強調させたいためでなかったらうか。同じ ETYMOLOGY の中で、つぎのようにあげられていて、

Sw. and Dan. *hval*. This animal is named from roundness or rolling; for in Dan. *hvalt* is arched or vaulted.

Webste's Dictionay.

「丸い」とか「円天井」とか「狭く暗い通路」といったような概念が暗に示されているからである。鯨の体内を狭く暗い通路にたとえることは、ヨナの物語以来のことであり、EXTRACTS の中にもいくつかあげられている。キリストの葬られた横穴もそうであつて、その通路をくぐり抜けることによって新生が得られるのである。仏教の回壇めぐりや修験道の大地の胎内くぐりなどをはじめ、狭く暗い通路は母体の産道の連想から、密教的入信式の儀式にはかならず経なければならぬ段階の一つである。『白鯨』の中でしばしば言及されるラザロもこの意味においてとらえることができるだろうし、Ahab の死もある意味では通路くぐりであり、彼が最後に手招きしたのは、なにかメッセージがあつて彼が水先案内人をつとめているかもしれないのである。

Fegee や Erromangoan の語源があげられている。よくわからないが、やはりなにか意図があつてのこととおもわれる。Feidelson(p.6)によると、Melville の造語らしいが、Fiji も the New Hebrides も Pequod 号が沈んだ海域の近くの島々であることと関連があつて EXTRACTS にあげてあるとおもわれる。Pequod 号の沈んだあたりは、朝日の極まるところ極東の赤道直下である。そこが Ahab の行った未知の世界への通路の玄関であったことと太陽がもっとも神聖にして旺んなる場所が Fiji や the New Hebrides のあたりということは無関係ではないと Melville が暗に示しているようにおもえてなら

『白鯨』のかくれた意味について

ない。

EXTRACTS に、

.... You must not, in every case at least, take the higgledy-piggledy whale statements, however authentic, in these extracts, for veritable gospel cetology. Far from it.

と Melville が書いているのは、偽装にすぎない。真実は、veritable gospel cetology (正真正銘の福音としての鯨学) であるといいたいのであろう。福音としてである。

ETYMOLOGY と EXTRACTS に書かれてある文が作品全体を解釈する鍵となるという意味からであろう。また結社の入信者たちにとっての手引きとなり拠りどころとなる経典文書の形式をかりているのだろう。

Melville がなぜこうした読者の側の解説を必要とする一方的な推理小説を試みたのか、理由は知るべくもないが、当時こういう試みがなかったわけではない。Melville 以前の Poe による推理小説があって、それには事件解決後に登場人物の対話による種明しがあった。いふなれば安堵感や解放感といったものを読者の側に与えるおもねりがあった。『白鯨』はそういった面を排除し、不可解さを前面に押し出し、読者をつきはなしている。出版当時の『白鯨』が不評だった原因の一つがうかがわれる。しかし Melville が Poe の作品に触発されたなどと結びつける根拠はない。むしろ Melville は『ヨブ記』から文体の発想を得ているのである。

ETYMOLOGY の The pale Usher が、文献調べをする恵まれぬ助教の姿と魂の指導者である導師の姿とが重ね合せられていることについてはすでに述べた。同じ文章の末尾につきのように書かれている。

..... it somehow mildly reminded him of his mortality.

この his mortality というのは、仮の姿あるいは仮相ともいうべきものであると思われる。仮相に対して実相あるいは真如ともいうべきものは何かといえば、それが導師としての永遠の姿であろう。助教の姿の背後におぼろげに現われている導師の姿は、物質現象や時空を超越した永遠の魂であるだろう。三位一体の精霊の働きに類似したものであるだろう。mortality を仮相ととらえることにして、それでは実相に当るものとして Melville はどういう言葉を用いているかといえば、それは Loomings の中にあるつぎの言葉にあたると思われる。

And still deeper the meaning of that story of Narcissus, who because he could not grasp the tormenting, mild image he saw in the fountain, plunged into it and was drowned. But the same image, we ourselves see in all rivers and oceans. It is the image of the ungraspable phantom of life; and this is the key to it all. (p. 26)

『白鯨』のかくれた意味について

この「捕捉されえぬ生命の幻」(ungraspable phantom of life)が、永遠の存在ともいうべき真如のことであると Melville がとらえたものであろう。輪廻の流転をくり返す個々の人間の仮の姿の奥に不動のまま永遠性を保つ魂の本質のようなものを phatom of life と Melville が呼んでいるのであろう。生成消滅の法則に支配される物質ではないために「捕捉されえぬ」(ungraspable) といったのであろう。だから「捕捉されえぬ」とは、Melville にとって、不可解を意味するのではなくて、明瞭なる実存なのである。だから、Melville は、「ここにすべてを解く鍵がある」(this is the key to it all) といい、すぐ前の文章で、Surely this is not without meaning と断言しているのである。Surely とか key to it all といった断定の表現は、Melville 自身の心中ではけっして不可解なのではないことを表わしている。さきほどの The pale Usher が二重の意味をもっていることからわかるように、Melville は仮相だけを表面に浮き立たせ、真相はたくみに表面からかくしてしまうように腐心しているのであり、『白鯨』はひじょうに手のこんだ技巧的な作品なのである。

ETYMOLOGY と EXTRACTS を全章の枠の外に置いて、かつ大文字で綴ってある意図については、作品の motto であるばかりでなく、さらに考えられることがある。奥義を著した古文書や碑文や経典の文章は、おおむね簡潔に偈文の形式で書かれている。

ETYMOLOGY と EXTRACTS は、作品全体に冠せられた偈文であるといえよう。偈文はまた、儀式を執り行うにさきだって読誦せられるものである。例えば仏教の授戒の儀式のばあい、十二門戒儀といって中国の妙楽大師(600年頃)に制定せられた戒儀が現今のわが国においても伝承され執り行われているのであるが、その十二の段階の儀式の最初にやはり偈文が読誦されて、しかるのちに第一の段階の「開導」へ入っていくことになる。その中国伝来の十二門戒儀の儀式と『白鯨』の構成があまりにも相似していることは驚異である。わが国の仏教のうち、もっとも顕教とみなされている宗門にあっても、こういった儀式は秘密の要素につつまれている。ましてヨーロッパ系の秘密宗教のもつ厳しさはいうまでもないが、秘密裡とはいえ、さまざまの経路と曲節をたどりながら、さまざまな形式があろうとは予想されるが、なおおおむねは大同小異ではなかろうかと思われる。その理由は、キリスト教であれ仏法であれ、異質の要素よりも共通する面の方が多いからである。たとえば三位一体とか三種の神器とか三宝などと呼ばれてそれぞれ尊ばれているものが、本質においては同じものを指しているからである。世界の偉大な宗教はすべてやがて整理統合されて一つのものになるべきであり、Melville も同じ意味から、ETYMOLOGY の助教に世界の民族の旗になぞらえた布切れを符牒として持たせていたものと思われる。『白鯨』の Chapter I, Loomings は十二門戒儀の第一段階の「開導」に当たっている。ここでは入信者が徒弟として受け入れられ修行するにあたっての心構えが説かれる。

Melville がいみじくも ETYMOLOGY と EXTRACTS と題した真意は、人が仮相

『白鯨』のかくれた意味について

と実相をそなえもっているように、言葉そのものにも仮相と実相が重ね合せられているということであろうか。ETYMOLOGYには、言葉の真の意味、言葉の真如、言葉のもつ永遠の生命、さらには言霊などの意味が Melville によってこめられているであろう。EXTRACTSには、引用文例という意のほかに、抽出せられたるもつとも純粹にして本質的なるものの意があるだろう。したがって Melville の文体のもつ最も著しい特徴とされている ambiguity なるものは、言葉や意味が単に二通りに解釈できるというのみならず、片方が仮相であり、かくれた方の他方が実相であるという軽重の差があるのである。Melville の文体のもつ、捕捉しえないものを捕捉しようとする歯がゆさと悲哀にみちたユーモアは仮相のもつ悲しさであり、それゆえにこそ、実相のもつ不動の壮重さと威厳がきわだたされるのである。